

違いのわかる Can-do リストの作成に向けて — 学習者 Can-do 自己評価のデータに基づくリストの検討 —

鈴木 美加

【キーワード】 Can-do 記述、全学日本語 Can-do リスト、自己評価、日本語教育

1. はじめに：Can-do リストの開発と検証

最近の各国の言語教育において、CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) の普及に伴い、Can-do 指標に基づくレベルの明示が一般的になりつつある。日本語教育においても、CEFR や、CEFR に基づく JF スタンダード (国際交流基金 2010) が広まり、欧州の日本語教育機関をはじめ、日本国内外の日本語コースにおける Can-do 記述の活用が行われている (ヨーロッパ日本語教師会 2012、毛利他 2014)。

このような流れの中、東京外国語大学留学生日本語教育センター (以下、JLCTUFS) では、日本国内の大学学部で必要とされる狭義のアカデミック・ジャパニーズ (以下 AJ) の養成を到達目標とする「JLC 日本語スタンダード」(JLCTUFS 2009、2011)、問題解決型タスクやアカデミック・インターアクションを多く組み込み、より広義の AJ の養成を目指した「全学日本語 Can-do リスト」(JLCTUFS 2012) の開発・改訂を行っている¹ (鈴木他 2012; 2013)。

Can-do リストの開発プロセスには Can-do 記述文の妥当性の検証が必要とされ²、日本語教育において、Can-do 記述文検証の先行研究として、学習者による自己評価データをもとに、①学習者の試験得点と Can-do との関連づけ (三枝他

¹ 「全学日本語 Can-do リスト」の開発は、全学日本語 Can-do プロジェクトのメンバーが行っている。2014 年度メンバーは藤森弘子、伊集院郁子、工藤嘉名子、花蘭悟、菅長理恵、坂本恵及び筆者であり、開発を開始した 2011 年度には、鈴木智美、藤村知子、中村彰と上記のうち、藤森、伊集院、花蘭、坂本、筆者がメンバーであった。

² 投野 (2013) はその方法として CEFR の原著 (Council of Europe 2001) をもとに、①直感的 (intuitive) 手法、②質的調査法、③量的調査法、を挙げている。各々の例として、①言語能力記述に詳しい専門家によるスケール作成と予備調査による改善、②教師を対象にしたレベル情報を外した Can-do 記述文の並べ替え調査 (質的調査)、③ Can-do 項目利用による学習者への大規模自己評価調査 (例 項目反応理論による分析) を紹介している。島田 (2010) は日本語 Can-do 記述の妥当性検証の方法を整理している。

2004、島田他 2006)、②学習者の日本語レベルと Can-do の関連づけ (村上 2009、保坂 2009、坂野 2013、鈴木他 2012)、③各 Can-do 評価値の散らばりの程度による記述改善 (倉科 2012)、④コース開始期・終了期の評価値の伸び (坂野 2013、鈴木他 2014)、について分析した研究などがあるが、まだ数が少ない。Can-do リストは各レベルの到達地点を示すとともに、学習者の日本語レベルや各授業での活動を位置づけるものとなり、各 Can-do が該当レベルで可能になる行動を明確に示すことが求められる。

本稿では、「全学日本語 Can-do リスト」2013 年版について、学習者による Can-do 自己評価データをもとに、

①学習時期 (コース開始期・終了期) による自己評価結果の違いの有無

②日本語レベルによる自己評価結果の違いの有無

の 2 点について統計的に分析を行い、Can-do リストの有効性を検討する。

2. 調査概要：学習者の Can-do 自己評価

2.1 「全学日本語 Can-do リスト」概要

「全学日本語 Can-do リスト」は本学全学日本語プログラム (以下、JLPTUFS)³ における日本語学習・教育の目標を Can-do (「～ができる」) の形で、日本語ゼロの初級レベルから日本語能力試験 N1 合格者が受講する上級、超級レベルまでを、全 8 レベルに分けて記述したリストである。リストは、技能別に①全レベル共通目標、② Can-do 目標、③ Can-do 目標細目により構成されている。該当レベルでの全体としての目標が、「Can-do 目標」としてまとまった形で示され、その目標に到達するための下位目標が「Can-do 目標細目」によって示される。

ここでは、各レベルの Can-do 目標細目数を表 1 に示す。各技能、レベルの Can-do 目標およびその設定については鈴木他 (2013; 2014) に詳しい。

³ 本プログラムは各学期 15 週で、初級 (100 レベル)・初中級 (200 レベル) は 1 週間 10 コマ (1 コマ 90 分) の集中授業、中～上級 (300-700 レベル) は各レベルが統合型授業の「総合」クラス (週 2～5 コマ) と、「技能クラス」 (各クラス週 1 コマ×5 科目) により構成され、超級 (800 レベル) は技能クラスのみである。中級以上については所属カテゴリーの履修要件などに合わせ、学生が履修科目を決めて登録する。

表1 JLPTUFS 日本語レベル別 Can-do 項目数：各技能目標細目（2013年版）

レベル(括弧内は 終了時の 目安)	初級前半 (終了時: JLPT N5、 CEFR A1)	初級後半 (N4、 CEFR A2)	中級1 (N3半ば、 CEFR B1)	中級2 (N3、 CEFR B1+)	中上級 (N2、 CEFR B2)	上級1 (N1半ば、 CEFR B2+)	上級2 (N1、 CEFR C1)	超級 (CEFR C1+ ~ C2)
読解	9	7	6	7	6	3	2	4
聴解	5	6	6	8	5	3	4	4
文章表現	5	8	14	13	11	5	9	6
口頭表現	9	8	8	5	5	7	3	-

2.2 学習者による Can-do 自己評価の調査概要

2.2.1 目的

今回の調査分析の目的は、「全学日本語 Can-do リスト」の各 Can-do 項目について、①コース開始期と終了期でその評価に変化があるのか、あるとすればどのような変化か、②複数レベルの学習者による同一 Can-do についての評価には異なりが見られるか、という点を明らかにすることである。

2.2.2 方法

a) 対象者及び分析対象データ

調査対象者は JLPTUFS を受講中の全 8 レベルの学生である。学期中の 2 回の調査に回答した 177 名のデータを分析の対象とした。

b) 調査項目及び自己評価の方法

各学習者の日本語レベルに対応する Can-do 細目の項目に加え、隣接する前後のレベルの Can-do 細目の項目（合計約 70～100 項目）を自己評価の対象とした。各項目の自己評価スケールは 4 段階とし、学習者が、「十分できる」「だいたいできる」「あまりできない」「できない」のどれかを選択する形式とし、それら 4 肢に加え、「わからない」を選ぶこともできる設定とした⁴。

c) 実施時期

2013 年度春学期および秋学期の各学期とも 2 回、学習者による全学日本語 Can-do 自己評価を実施した。以下には、両学期の 1 回目（5 月、11 月）を「開始期」、2 回目（7 月、2 月）を「終了期」と呼ぶ。

⁴ 本学 e-Learning システム「JPLANG」の LMS 機能を使用し、各学生がサイトにアクセスし、回答した。

d) 分析方法

各学習者の各々の Can-do 自己評価の回答は、「十分できる」4点、「だいたいできる」3点、「あまりできない」2点、「できない」1点として数値化し⁵、自己評価データをレベル別、技能別に集計し、分析を行った。

3. 調査の結果

3.1 学習者による Can-do 自己評価データの信頼性

得られたデータの信頼性を α 係数の算出により調べたところ、表2に示す通り、各レベルの α 係数は0.880～0.986で本データの信頼性は高いといえる。

表2 Can-do 自己評価の信頼性 (α 係数)

レベル	100 (初級前半 ～後半)	200 (初級後半 ～中級初め)	300 (中級前半)	400 (中級半ば)	500 (中上級)	600 (上級前半)	700 (上級半ば)	800 (上級後半)
開始期	0.96	0.94	0.96	0.99	0.96	0.98	0.97	0.94
終了期	0.95	0.94	0.97	0.99	0.98	0.98	0.97	0.88

3.2 レベル別 Can-do 自己評価データ結果

各レベルのコース開始期、終了期の Can-do 自己評価データを、技能別に表3に示す。表には、各レベルの学習者が回答対象とした Can-do 項目の自己評価値合計の平均値 (Mean) と標準偏差 (SD) が示されている。例えば、初級学習者 (100 レベル) は初級前半の Can-do 項目と、初級後半の Can-do 項目について自己評価を行っており、表3に初級学習者16名の2レベルの Can-do 項目の自己評価値合計の平均と標準偏差が、時期別 (開始期:「初」、終了期:「終」) に示されている。各 Can-do 自己評価値は1～4の値をとり、各レベルの Can-do 自己評価値の合計得点は、項目数×4が満点となる。表の見出しの「total」は満点の得点を示す。

各レベル、各技能の開始期と終了期の自己評価値を見ると、どの技能においても、終了期のほうが自己評価値が高い項目がほとんどである⁶。これは該当学期の間に学習者自身の日本語の力が伸び、各 Can-do 項目について「できる」と判断した者が増えたことを示していると推測される。また、レベル間の自己評価値に

⁵ 「わからない」の回答データは、開始期、終了期とも該当 Can-do 項目の分析から外した。

⁶ 超級 (800 レベル) 学習者の読解の超級 Can-do 項目のみ、終了期に評価値が下がった。

についても、同じレベルの Can-do 自己評価値は、一部を除き、上のレベルほど高くなっている。これは上のレベルの学習者ほど、同じ Can-do の自己評価値が高くなる傾向があることを示し、Can-do のレベル設定がほぼ適切であると考えられる。そこで、これらの結果をもとに、次節以降で統計的な分析を行う。なお、超級 (800 レベル) 学習者のデータが少ないため、これ以降の分析には含めない。

4. 調査結果の分析

4.1 時期による自己評価データの比較

4.1.1 レベル別集計

3で示した結果をもとに、開始期と終了期の Can-do 自己評価結果を比較し、時期による学習者の自己評価値の異なりを t 検定により調べることにした。表4は、各レベルの学習者が対象とした項目の Can-do 自己評価値合計 (開始期および終了期; 表3 データ参照) を基づく t 値 (t-score) を示している。開始期と終了期の比較により、有意な差が認められたレベルには、表の t 値に有意水準を示すマーク (*, **, †) を付している。例として、中級1学習者 (300 レベル) の読解 Can-do データを見てみよう。学習者が回答対象とした Can-do 項目は、レベルに対応した「中級1」、隣接する「初級後半」、「中級2」の3レベルの項目である。初級後半の Can-do 自己評価値合計の平均は開始期が22.0、終了期が23.5である。この違いが有意かどうかを調べるため、t 値を算出し、対応のある t 検定を行った。t 値は2.92、対象者21名 (自由度20) で両側検定を行った結果、1%水準で有意であるとわかり、1%水準の有意差が表に**で示される。同様に5%水準は「*」、出現確率が10%未満である ($.05 < p < .10$) 場合、有意傾向を示すとして「†」を付している。

表4に示した通り、多くのレベルで有意な差が見られた⁷。表3では各技能について、ほとんどのレベルで終了期に自己評価値が上がっている結果が得られたが、統計的にその多くが有意、または有意傾向を示していることがわかった。

表中の太字部分は、該当学習者が学習対象とするレベルの Can-do であることを示す。全体として、カバーされている Can-do について、有意な伸びが認められるレベルが多いことがわかる。つまり、各レベルの Can-do 記述文により、終了期の伸びが全体として明確に示され、隣接するレベルでも終了期の伸びを示すことのできる Can-do が多かったと言える。

⁷ 紙面の制約から表3のデータを再掲していないが、有意差の見られた項目はすべて開始期より終了期のほうが自己評価値が高い結果となっている。

表3 学期開始期と終了期の各技能のCan-do 結果

読解Can-do	初級前半		初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		上級2		超級		
	/36		/28		/24		/28		/24		/12		/8		/16		
	時期	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終
初級学習者(100)	Mean	28.6	31.9	20.6	23.3												
N=16	SD	4.2	3.4	4.7	3.0												
初中級学習者(200)	Mean	30.8	32.1	22.7	23.8	16.5	19.0										
N=12	SD	3.3	2.4	2.7	1.6	2.6	2.4										
中級1学習者(300)	Mean			22.0	23.5	17.6	19.5	21.3	23.2								
N=21	SD			2.9	3.0	2.7	2.7	3.4	2.9								
中級2学習者(400)	Mean					19.3	20.6	22.1	23.5	18.0	19.3						
N=41	SD					2.8	2.6	3.6	3.0	2.9	3.1						
中上級学習者(500)	Mean							23.3	23.9	18.2	19.5	9.1	9.7				
N=35	SD							1.9	2.5	2.2	2.4	1.4	1.5				
上級1学習者(600)	Mean									18.9	20.4	9.3	10.2	5.9	6.7		
N=29	SD									2.5	2.3	1.5	1.4	1.1	1.0		
上級2学習者(700)	Mean											9.5	10.2	6.3	6.9	12.2	12.4
N=20	SD											1.4	1.0	1.2	1.0	2.2	2.2
超級学習者(800)	Mean													6.7	7.0	13.0	12.3
N=3	SD													1.2	1.0	1.0	0.6
回答者全体	Mean	29.5	32.0	21.7	23.5	18.4	20.0	22.3	23.6	18.3	19.7	9.2	10.0	6.1	6.8	12.3	12.4
	SD	4.00	2.99	3.84	2.73	2.95	2.68	3.16	2.80	2.59	2.68	1.44	1.48	1.16	1.03	2.09	2.07

読解Can-do	初級前半		初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		上級2		超級		
	/20		/24		/24		/32		/20		/12		/16		/16		
	時期	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終
初級学習者(100)	Mean	14.9	16.1	16.5	18.3												
N=16	SD	3.0	2.6	3.6	2.8												
初中級学習者(200)	Mean	15.8	16.0	17.6	21.2	17.0	18.1										
N=12	SD	1.6	2.2	3.1	3.0	3.0	2.7										
中級1学習者(300)	Mean			18.6	20.1	18.5	19.5	23.5	25.2								
N=21	SD			2.6	2.6	3.0	3.0	3.6	4.1								
中級2学習者(400)	Mean					18.8	19.5	24.8	25.7	14.1	15.0						
N=41	SD					3.5	3.5	4.1	3.9	2.9	3.0						
中上級学習者(500)	Mean							25.7	26.5	15.8	16.1	9.5	9.9				
N=35	SD							3.0	3.0	2.5	2.1	1.4	1.3				
上級1学習者(600)	Mean									16.2	17.2	9.9	10.7	12.2	13.0		
N=29	SD									2.3	1.8	1.9	1.2	1.7	1.8		
上級2学習者(700)	Mean											10.7	10.8	12.9	13.1	12.3	12.6
N=20	SD											1.1	1.2	2.0	1.9	2.1	2.5
超級学習者(800)	Mean													12.7	13.3	11.7	13.0
N=3	SD																
回答者全体	Mean	15.3	16.1	17.7	19.8	18.4	19.2	24.8	25.9	15.2	16.0	9.9	10.4	12.9	13.1	12.2	12.7
	SD	2.56	2.45	3.21	2.98	3.35	3.25	3.76	3.71	2.78	2.58	1.62	1.31	1.87	1.94	14.28	14.87

文章表現Can-do	初級前半		初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		上級2		超級		
	/20		/32		/56		/52		/44		/20		/36		/24		
	時期	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終
初級学習者(100)	Mean	18.3	19.2	20.7	23.9												
N=16	SD	2.1	1.1	4.7	5.3												
初中級学習者(200)	Mean	18.5	18.9	23.3	26.3	38.4	45.3										
N=12	SD	2.0	2.0	3.3	3.5	5.6	6.7										
中級1学習者(300)	Mean			23.3	25.4	41.1	44.0	34.1	38.9								
N=21	SD			4.5	4.8	6.5	7.0	7.2	6.9								
中級2学習者(400)	Mean					43.1	45.8	35.9	38.6	29.4	31.9						
N=41	SD					6.7	6.0	7.9	7.1	6.6	6.5						
中上級学習者(500)	Mean							38.8	41.0	32.7	34.4	14.4	15.7				
N=35	SD							4.4	4.8	4.1	4.4	1.7	2.4				
上級1学習者(600)	Mean									34.4	37.3	15.2	16.9	26.8	30.2		
N=29	SD									5.3	4.0	2.5	2.0	4.8	3.8		
上級2学習者(700)	Mean											14.7	15.6	26.7	27.6	17.6	18.4
N=20	SD											2.2	2.4	4.4	4.3	3.5	3.6
超級学習者(800)	Mean													23.0	25.7	19.0	19.7
N=3	SD													2.6	4.2	2.6	3.1
回答者全体	Mean	18.4	19.1	22.5	25.1	41.8	45.2	36.6	39.5	31.9	34.2	14.7	16.1	26.8	29.1	17.8	18.6
	SD	2.06	1.55	4.49	4.77	6.69	6.47	6.91	6.40	5.89	5.69	2.17	2.36	4.53	4.23	21.07	21.85

口頭表現Can-do	初級前半		初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		上級2		
	/36		/32		/32		/24		/20		/28		/12		
	時期	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終
初級学習者(100)	Mean	26.3	30.1	18.0	23.4										
N=16	SD	4.1	3.2	5.4	5.2										
初中級学習者(200)	Mean	30.2	31.0	21.3	25.1	20.3	25.1								
N=12	SD	3.8	4.7	2.9	4.9	3.9	4.2								
中級1学習者(300)	Mean			23.2	25.0	22.8	24.5	16.3	18.0						
N=21	SD			4.6	4.4	4.5	4.3	3.1	3.4						
中級2学習者(400)	Mean					24.9	25.5	16.8	18.0	13.7	14.8				
N=41	SD					4.2	4.7	3.4	3.6	2.9	3.3				
中上級学習者(500)	Mean							18.5	19.4	15.0	15.5	20.7	21.9		
N=35	SD							2.6	2.6	2.5	2.4	4.7	4.8		
上級1学習者(600)	Mean									15.1	16.4	21.6	23.4	8.9	9.8
N=29	SD									2.7	2.4	3.5	3.1	1.8	1.7
上級2学習者(700)	Mean											21.8	22.0	24.0	19.0
N=20	SD											3.8	4.4	1.6	1.8
回答者全体	Mean	28.0	30.5	21.0	24.5	23.5	25.1	17.3	18.5	14.5	15.5	21.3	22.4	8.7	9.3
	SD	4.40	3.92	5.06	4.87	4.53	4.55	3.21	3.29	2.82	2.85	4.13	4.25	1.74	1.84

表4 開始期と終了期の読解 Can-do 自己評価値の比較：t 値

読解Can-do (**p<.01, *p<.05, †.05<p<.10)

	初級前半	初級後半	中級1	中級2	中上級	上級1	上級2	超級
100初級学習者 (n=16)	3.78**	3.20**						
200初中級学習者 (n=12)	1.80†	1.36	3.93**					
300中級1学習者 (n=21)		2.92**	3.17**	2.63*				
400中級2学習者 (n=41)			4.23**	3.47**	3.42**			
500中上級学習者 (n=35)				1.73†	3.05**	2.73**		
600上級1学習者 (n=29)					4.95**	3.55**	3.39**	
700上級2学習者 (n=20)						2.32**	2.29**	0.69

聴解Can-do

	初級前半	初級後半	中級1	中級2	中上級	上級1	上級2	超級
100初級学習者 (n=16)	2.48*	2.92**						
200初中級学習者 (n=12)	0.34	3.58**	1.96†					
300中級1学習者 (n=21)		2.25**	1.42	1.79†				
400中級2学習者 (n=41)			1.77†	1.83†	2.46**			
500中上級学習者 (n=35)				1.90†	0.19	1.60		
600上級1学習者 (n=29)					2.51*	2.69*	3.18**	
700上級2学習者 (n=20)						0.48	0.55	0.71

文章表現Can-do

	初級前半	初級後半	中級1	中級2	中上級	上級1	上級2	超級
100初級学習者 (n=16)	2.61*	3.73**						
200初中級学習者 (n=12)	1.19	5.50**	5.35**					
300中級1学習者 (n=21)		2.64*	2.46*	3.90**				
400中級2学習者 (n=41)			4.51**	3.61**	4.06**			
500中上級学習者 (n=35)				2.98**	2.44*	3.25**		
600上級1学習者 (n=29)					4.20**	5.47**	5.30**	
700上級2学習者 (n=20)						1.58	1.15	1.15

口頭表現Can-do

	初級前半	初級後半	中級1	中級2	中上級	上級1	上級2
100初級学習者 (n=16)	5.29**	4.82**					
200初中級学習者 (n=12)	1.36	3.40**	2.94**				
300中級1学習者 (n=21)		1.76†	2.01†	2.13*			
400中級2学習者 (n=41)			1.14	3.10**	2.52*		
500中上級学習者 (n=35)				2.38*	1.66	2.62*	
600上級1学習者 (n=29)					2.83**	4.49**	4.03**
700上級2学習者 (n=20)						0.24	0.59

一方で、有意な伸びが認められないレベルもあった。以下にそのレベルを技能別に示す。数字は学習者の日本語レベルを示す。

読解 初級後半：200 レベル (初中級)

超級：700 レベル (上級2)

聴解 初級前半：200 レベル

中級1：300 レベル (中級1)

中上級、上級1：500 レベル (中上級)

上級1、上級2、超級：700 レベル

文章表現 初級前半：200 レベル

上級1、上級2、超級：700 レベル

口頭表現 初級前半：200 レベル
中級1：400 レベル (中級2)
中上級：500 レベル (中上級)
上級1、上級2：700 レベル

これらの結果から、学期中の学習による日本語の伸びが反映されている技能・レベルと、反映が顕著ではない技能・レベルがあることがわかる。

上級2学習者(700レベル)の自己評価値データでは、読解以外の技能では有意な伸びが見られなかった。この原因の可能性として、レベルのCan-do記述の修正の必要性に加え、上級レベルの学習者ほど、履修する日本語授業科目数が少なくなり、700レベルの学習者は平均3.88コマ⁸で履修科目も学習者により異なり、1学期のみの技能の伸びが現れにくいこと、が考えられる。

4.2 レベルによる自己評価データの比較

先の3の表3で示した結果及び各学習者の自己評価データをもとに、複数レベルの学習者によるCan-do項目の自己評価値の比較を行った。表5は、横軸にCan-do項目の日本語レベルを、縦軸の各欄には、回答を行った学習者の日本語レベルが示され、欄にある2レベルの自己評価値の比較がなされたことを示す。例えば、読解Can-doにおいて、中級1学習者(300レベル)の自己評価値と、中級2学習者(400レベル)の学習者の値が比較されており、中級1Can-doの開始期の自己評価値は、表3にあるように、中級1学習者(300レベル)17.6、中級2学習者(400レベル)19.3であり、この評価値の違いを統計的に分析した結果、t値が2.19で5%有意であり、表の2.19に「*」が付されている。同様に、各技能、各レベルにおいて、Can-do自己評価値の異なりが有意か、t値の算出を行い、分析した。その結果を以下、開始期と終了期に分け、有意な差が認められたレベルと技能を挙げる⁹。なお、以下に示す100～700の数字は学習者の日本語レベルを示す。

開始期 100×200 口頭表現(初級前半、初級後半：有意傾向)
300×400 読解(中級1)、口頭表現(中級1：有意傾向)、

⁸ 2013年度春・秋学期の登録学習者データに基づく。

⁹ 紙面の制約から表3のデータを再掲していないが、有意差の見られた項目は下のレベルの学習者の自己評価値より、上のレベルの自己評価値が高い結果となっている。

表5 隣接2レベルのCan-do自己評価値の比較：t値¹⁰

読解Can-do	初級前半		初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		上級2			
	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終		
			1.34 0.72(df=22)		1.12 0.54		2.19* 1.47		0.81 0.37		0.25 0.22		1.10 1.56		0.52 1.47	
100初級×200初中級(df=26)	1.43	0.12														
200初中級×300中級1(df=31)			0.67	0.43(df=30)												
300中級1×400中級2(df=60)							1.83(df=63)†	0.62								
400中級2×500中上級(df=74)									0.25	0.22						
500中上級×600上級1(df=82)									1.10	1.56			0.52	1.47		
600上級1×700上級2(df=47)												0.40	0.02	1.05	0.64	

聴解Can-do	初級前半		初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		上級2			
	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終		
			0.99 1.00		0.31 0.01		1.18 1.01		2.67** 1.78†		0.86		1.32(df=47)		2.05* 0.21	
100初級×200初中級(df=26)	0.96	0.13	0.81	2.96*												
200初中級×300中級1(df=31)			0.99	1.00			1.35	1.30								
300中級1×400中級2(df=60)							0.31	0.01								
400中級2×500中上級(df=74)									1.12	1.01						
500中上級×600上級1(df=82)											0.86					
600上級1×700上級2(df=47)													1.32(df=45)†	0.21	1.25	0.03

文章表現Can-do	初級前半		初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		上級2			
	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終		
			1.60 0.59		1.67 1.03		1.88(df=63)† 1.70(df=70)†		2.59(df=80)* 1.95(df=70)†		1.32(df=47)		2.05* 0.09			
100初級×200初中級(df=26)	0.31	0.41(df=16)	1.60	1.31												
200初中級×300中級1(df=31)			0.00	0.59			1.18	0.47								
300中級1×400中級2(df=60)							1.67	1.03								
400中級2×500中上級(df=74)									1.88(df=63)†	1.70(df=70)†						
500中上級×600上級1(df=82)											1.42					
600上級1×700上級2(df=47)													1.32(df=47)	2.05*	0.09	2.21*

口頭表現Can-do	初級前半		初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		上級2			
	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終		
	2.45* <th colspan="2">0.61 <th colspan="2">1.88(df=23)† <th colspan="2">1.55 0.38 <th colspan="2">1.75† 0.79 <th colspan="2">2.42* 2.00* <th colspan="2">2.02* 1.05 <th colspan="2">0.25 1.51 </th></th></th></th></th></th></th>		0.61 <th colspan="2">1.88(df=23)† <th colspan="2">1.55 0.38 <th colspan="2">1.75† 0.79 <th colspan="2">2.42* 2.00* <th colspan="2">2.02* 1.05 <th colspan="2">0.25 1.51 </th></th></th></th></th></th>		1.88(df=23)† <th colspan="2">1.55 0.38 <th colspan="2">1.75† 0.79 <th colspan="2">2.42* 2.00* <th colspan="2">2.02* 1.05 <th colspan="2">0.25 1.51 </th></th></th></th></th>		1.55 0.38 <th colspan="2">1.75† 0.79 <th colspan="2">2.42* 2.00* <th colspan="2">2.02* 1.05 <th colspan="2">0.25 1.51 </th></th></th></th>		1.75† 0.79 <th colspan="2">2.42* 2.00* <th colspan="2">2.02* 1.05 <th colspan="2">0.25 1.51 </th></th></th>		2.42* 2.00* <th colspan="2">2.02* 1.05 <th colspan="2">0.25 1.51 </th></th>		2.02* 1.05 <th colspan="2">0.25 1.51 </th>		0.25 1.51	
100初級×200初中級(df=26)	2.45*	0.61	1.88(df=23)†	0.82												
200初中級×300中級1(df=31)				1.32			1.55	0.38								
300中級1×400中級2(df=60)							1.75†	0.79								
400中級2×500中上級(df=74)									2.42*	2.00*			2.02*	1.05		
500中上級×600上級1(df=82)											0.25	1.51		0.90	1.62(df=58)	
600上級1×700上級2(df=47)													0.12	1.38	0.90	2.30*

- 400×500 読解(中級1)、聴解(中上級)、
文章表現(中級2、中上級)、口頭(中級2、中上級)
- 600×700 聴解(上級1：有意傾向)
- 終了期 100×200 聴解(初級後半)
- 400×500 文章表現(中級2：有意傾向、中上級：有意傾向)、
口頭表現(中級2)
- 500×600 聴解(中上級、上級1)、文章表現(中上級、上級1)
- 600×700 文章(上級1、上級2)、口頭表現(上級2)

この結果を見ると、初級から上級(超級)を8レベルに分け、提示されたCan-doは、技能、レベルにより、レベル間の境界が明確である場合とそうでない場合があることがわかる。両期とも、200初中級学習者×300中級1学習者については、どの技能においても有意差が認められなかった。

また、1レベル隔てた2レベル間のCan-do自己評価値の比較を行い、上記の結果をさらに分析した。表6にその結果を示す。この結果を見るとレベル間のデー

¹⁰ 自由度(df)の値が欄内に記されている箇所は、2グループ間で分散の大きさが等質であると見せなかったため、ウェルチの法によるt検定の結果を示している。

表6 1レベル隔てた2レベル間のCan-do自己評価値の比較：t値

(**p<.01, *p<.05, †.05<p<.10)

	初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		
	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	
100初級×300中級1(df=35)	1.01(df=23)	0.22									
200初中級×400中級2(df=51)			3.00**	1.86†							
300中級1×500中上級(df=54)					2.40*(df=27)	0.93					
400中級2×600中上級(df=68)							1.21	1.58			
500中上級×700上級1(df=53)									0.91	1.29	

	初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		
	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	
100初級×300中級1(df=35)	2.02†	2.09*									
200初中級×400中級2(df=51)			1.60	1.28							
300中級1×500中上級(df=54)					2.43*	1.33					
400中級2×600中上級(df=68)							3.21**	8.82***(df=67)			
500中上級×700上級1(df=53)									3.17**	2.50*	

	初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		
	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	
100初級×300中級1(df=35)	1.69	0.85									
200初中級×400中級2(df=51)			2.15*	0.27							
300中級1×500中上級(df=54)					2.59*(df=28)	1.31					
400中級2×600中上級(df=68)							3.31**	4.28***(df=66)			
500中上級×700上級1(df=53)									0.41	0.24	

	初級後半		中級1		中級2		中上級		上級1		
	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	
100初級×300中級1(df=35)	3.10**	0.99									
200初中級×400中級2(df=51)			3.29**	0.25							
300中級1×500中上級(df=54)					2.73**	1.69†					
400中級2×600中上級(df=68)							2.07*	2.25*			
500中上級×700上級1(df=53)									0.87	0.05	

タが有意である割合が高くなっている。技能別でみると、聴解で有意な異なりが多く見られる。時期としては、どの技能も開始期のほうが終了期より有意な結果が出ている。これは学期開始期には、Can-do項目で示された行動についての自己評価値の差が大きかったが、終了期には差が小さくなった可能性が示唆される。

4.3 Can-do項目ごとの分析例

4.1および4.2で示された結果を踏まえて、ここでは結果の分析の一例として、読解の初級後半のCan-do項目及び対応レベルの学習者の特性などを含め、考えてみたい。

読解技能では初級後半Can-do項目が200初中級レベル学習者の開始期と終了期の自己評価値では有意な差が認められず、さらにレベル間の有意な異なりも見られなかった。この結果の原因として、Can-do記述文の修正の必要性和ともに、レベルの学習者の性質が影響していることも推測される。200初中級レベルは初級前半を終えたばかりの者から、海外などで数年日本語学習の経験があり、中級レベルを学習中だが基礎運用能力が不足している者も属する。300レベルには初級をすでに終了し、関連の運用能力を有すると判断される者が振り分けられる。学習者の自己評価については、Can-doで記された行動の経験の有無(根岸 2006)

や文化による評価値の異なりの可能性(村上2010)などが指摘されており、学習者の日本語学習歴や経験は多様であることから、この項目に関しての有意な結果が認められなかった可能性がある。初級後半では身近なトピックについて易しい言葉で書かれた文章を読解対象にし、例えば、Can-do細目②「文章中に知らない言葉が数語含まれていても、その言葉の意味を予測する、あるいは読み飛ばすことによって、文章全体の意味をつかむことができる」への回答結果は表7および図1の通りである。100レベルの初級学習者の伸びは顕著であるが、200レベルの学習者の伸びはあまり見られない。これを見ると、満点は4点でまだ伸びる余地はありそうだが、どのレベルも終了期の値が3.3程度であることから天井効果で、伸びがこれ以上現れない可能性があると言える。

中級1Can-do細目③「作り方の順番や、変化の説明の文章をスムーズに読み進めることができる。読んだ後で簡単に内容を説明できる」の結果を見てみよう。ここではどのレベルも終了期に伸びが見られ、200レベルでは10%水準ではあ

表7 初級後半 Can-do 細目② 自己評価値

	開始期		終了期		p(出現確率)
	X	SD	X	SD	
100(n=16)	2.63	0.89	3.25	0.68	0.00
200(n=12)	3.17	0.83	3.25	0.62	0.75
300(n=21)	3.00	0.55	3.29	0.56	0.03

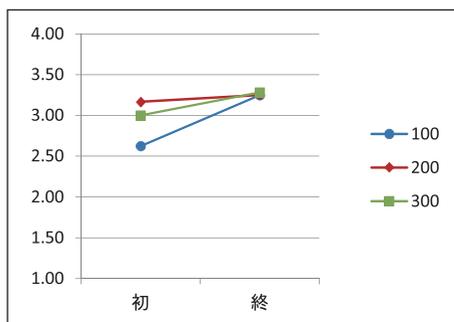


図1 初級後半 Can-do 細目② 自己評価値

表8 中級1 Can-do 細目③ 自己評価値

	開始期		終了期		p(出現確率)
	X	SD	X	SD	
200(n=12)	2.42	0.67	2.83	0.39	0.05
300(n=21)	2.81	0.51	3.19	0.60	0.01
400(n=41)	3.05	0.78	3.37	0.58	0.01

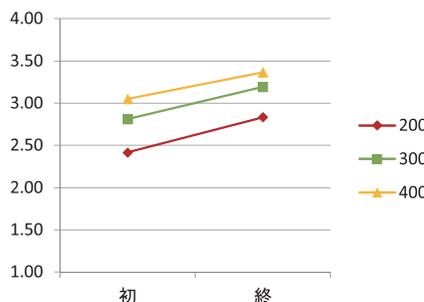


図1 中級1 Can-do 細目③ 自己評価値

るが、有意な傾向となっている。200 レベルでは中級前半もカバーすることから学習者にとっては少し難しめの Can-do 設定であったほうがより伸びが明らかになることが推測される。これについてはさらに詳細に分析を行う必要がある。

5. 考察及び今後の課題

これまでに述べた今回の学習者の Can-do 自己評価の調査結果とその分析から以下のことがわかった。

- 1) コース開始期と終了期との比較から、終了期に各技能の多くのレベルで有意に自己評価値が上がっており、各レベルの Can-do 記述文の多くは日本語の技能の伸びを明確に示すものである。一方で、有意な伸びが見られなかった技能・レベルがあり、この原因として、レベルの Can-do 記述の修正の必要性とともに、該当レベルの学習者の履修科目数や学習歴、経験の多様性などの影響が推測される。
- 2) 隣接する2レベル間の Can-do 項目の自己評価値の比較を行ったところ、自己評価値に有意な異なりが認められる技能・レベルとそうではないものがあり、初級より中級以上のレベルにおいて有意差が認められる傾向が見られた。さらに、1レベル隔てた2レベル間の Can-do 自己評価値の比較を行った結果、隣接する2レベル間での比較より、有意差が認められるレベルが増え、この比較では開始期のほうが終了期より有意な結果が見られた。これらの結果は、より詳細な検討が必要である。
- 3) 個別の Can-do 細目の分析例から、項目によっては、ある一定のところで「天井」値となり、「十分できる」が選ばれにくいことが推測される。つまり、この場合、上のレベルの学習者でもそれ以上の評価値にはなりにくいのではないかと考えられる。

これらのことから、「全学日本語 Can-do リスト」(2013年版)は、①各レベルのコースにおける伸びを示す Can-do として概ね妥当である、②レベル間での比較から、レベル間の境界は Can-do 自己評価の結果から明確である場合とそうでない場合があり、現時点で、このリストでは日本語の技能を初級から上級(超級)までの8レベルを厳密に規定することはできないが、2レベルほどの幅を持たせた段階分けにより、レベル関連の情報がある程度提供できるといえる。

今回の結果は、「全学日本語 Can-do リスト」開発にあたって、プログラムにおけるレベル設定及び開講科目の目標・内容を洗い出し、プログラム内での一貫性のある Can-do をより強く意識していたこととも大きく関係していると思われる。該当学期におけるコースの伸びは有意に示された一方で、レベル間を明確に区別する Can-do 記述の改善の余地は十分あると言えよう。レベル数が多くなるほどレベル間の違いを明示する Can-do 記述は難しくなると考えられるが、各技能、各レベルの Can-do 記述文をより詳細に分析し、有意差の認められた記述とそうではない記述の特徴の分析から、より精緻であると同時に比較的簡潔でわかりやすい Can-do 記述文¹¹の作成が可能になると期待される。

また、学習者の自己評価の時期に関し、「開始期」としているのは、履修登録がほぼ完了した、コース開始約3週間後の時期である。「開始期」としては授業開始後1～2週間程度の時期のほうが、より学習者の変化、レベル間の異なりを反映した回答結果になるであろう。「開始期」の調査時期を早めることも検討したい。

6. 終わりに

「全学日本語 Can-do リスト」は、先に触れたように、これまでの全学日本語プログラムの授業内容及びプログラムの目的、各レベルの目標をもとに開発、改訂しているリストである。本学 Can-do リスト開発の主な目的は、学習者への目標明示、教師・教育関係者間の情報共有、海外の大学との単位互換及びアーティキュレーションの3点である。本リストは現在改訂中であり、今後、公開される予定である。AJの1つの方向性を示す Can-do リスト開発のプロセスにおいて、今回の分析を生かしたいと考えている。

本研究は、東京外国語大学留学生日本語教育センター2011～2014年度教育研究プロジェクトの一環で実施したものである。

¹¹ 投野(2013)は Can-do 記述に関し、受容技能では task, text, condition、産出技能では performance, quality, condition の要素が必要であるとしているが、特定の教育課程、教育環境、学習者のための内部指標の作成の際、必ずしも3要素を含むとは限らないと述べている。

参考文献・資料：

- 国際交流基金 (2010) 『JF 日本語教育スタンダード 2010』国際交流基金
〈http://jfstandard.jp/pdf/jfs2010_all.pdf〉 (2014.11.30 閲覧)
- 倉品さやか「Can-do statements を用いた中級日本語学習者の自己評価—回答のばらつきに注目して—」北東アジア言語教育学会 proceedings
〈<http://nearconference.weebly.com/uploads/1/2/7/1/12718010/near-2012-04.pdf>〉 (2014.11.30 閲覧)
- 三枝令子 (2004) 『日本語 Can-do-statements 尺度の開発 研究成果報告書』(科学研究費補助金 基盤研究 (B1) 課題番号 13480068)
- 島田めぐみ・三枝令子・野口裕之 (2006) 日本語 Can-do-statements を利用した言語行動記述の試み：日本語能力試験受験者を対象として、『世界の日本語教育』、16、pp.75-88.
- 島田めぐみ (2010) 「自己評価 Can-do statements に関する一考察：客観テストとの比較を通して」東京学芸大学紀要 61 (2)、pp.267-277
- 鈴木美加、藤森弘子 (2014) 「Can-do リスト開発プロセスにおける学習者の自己評価とその分析」39、pp.53-68.
- 鈴木美加、藤森弘子、藤村知子、鈴木智美、中村彰、花蘭悟、伊集院郁子 (2013) 「大学教育における日本語コースの Can-do 設定—日本語の技能を言語知識や態度と結びつけた記述の試み—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』39、pp.65-82
- 鈴木美加、藤森弘子、藤村知子、鈴木智美、中村彰、坂本恵、花蘭悟、伊集院郁子 (2012) 「日本語学習における目標記述をめぐって—全学日本語プログラムの Can-do リスト作成に向けて—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』38、pp.155-166.
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2009) 「JLC 日本語スタンダード 2009 改訂版」
東京外国語大学留学生日本語教育センター (2011) 「JLC 日本語スタンダード 2011 改訂版」
東京外国語大学留学生日本語教育センター (2012) 「全学日本語 Can-do リスト試行版」
(内部資料)
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2013) 「全学日本語 Can-do リスト 2013 年版」
(内部資料)
- 投野由紀夫編 (2013) 『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』大修館
- 根岸雅史 (2006) 「GTEC for STUDENTS Can-do Statements の妥当性検証研究概観」、『ARCLE REVIEW』1、pp.96-103.
- 坂野永理、大久保理恵 (2012) 「CEFR チェックリストを使った日本語能力の自己評価

- の変化』『大学教育研究紀要 8』、岡山大学国際センター、pp.179-190
- 村上京子 (2008) 「日本語学習者の能力記述によるレベル表示」『名古屋大学留学生センター紀要』第 6 号、pp.49-60.
- 森本由佳子・塩澤真季・小松知子・石司えり・島田徳子 (2011) 「JF Can-do の作成と評価—CEFR の A2・B1 レベルに基づいて—」『国際交流基金日本語教育紀要 7 号』pp.25-42.
- 毛利貴美、古川智樹 (2014) 「日本語プレースメントにおける CEFR/JF 日本語教育スタンダードの Can-do-statement の利用—日本語教育における渡日前—渡日後のアーティキュレーションの実現—」14th EAJS International Conference 口頭発表 (於スロベニア)
- ヨーロッパ日本語教師会 (2012) 『ヨーロッパ日本語教育：第 1 回ヨーロッパ日本語教育ワークショップ報告・論文集—CEFR・JF 日本語教育スタンダードを生かした日本語教育』17
- Council of Europe、吉島茂・大橋理枝訳・編 (2008) 『外国語教育 II—外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』初版第 2 版、朝日出版社 (原著 Common European Framework for Reference of Languages: Learning, teaching, assessment. 3rd, John Trim, Brian North, Daniel Coste, 2002, Cambridge University Press.)

Developing a Distinct Can-do List for Japanese Language Learning: Based upon Learner Self-Assessment Data

SUZUKI Mika

This paper examines the appropriateness of the “JLPT Can-do List,” which was designed to gauge language level and can-do behavior in Japanese for academic purposes based upon learner self-assessment data.

For this research, 177 Japanese language learners were asked to assess their language skills in the form of can-do descriptors at the beginning and ending point of the course, and the four-grade evaluation data items were statistically analyzed. The analysis targeted 1) whether or not there is a significant difference in terms of “can-do” assessments between the beginning and ending point of the course, and 2) whether “can-do” assessment results differ significantly between two successive or close levels.

Based on the results, “can do” assessment scores appeared significantly higher, in almost all levels and skills, at the ending period than at the beginning. Non-significant results in advanced levels are assumed to have been caused by the fact that learners were taking very few registered credits in Japanese subjects.

Meanwhile, the Can-do assessment between two successive levels showed significant differences in several intermediate or advanced skill areas while there were few at the basic level. In addition, two levels with one level separating them (ex. 100 beginning level and 300 intermediate level) showed more significant differences than two successive levels, especially at the beginning point. The conclusion is that the “can-do” list classifies wider rankings than the precise eight language levels.

Further detailed investigation concerning each descriptor is expected based on the results of this research.